

平成22年度岡山県麻しん対策会議及び岡山県感染症対策委員会 予防接種部会の議事概要

- 1 開催日時 平成23年3月16日(水) 17:00～18:30
- 2 場 所 三光荘パブリゾン
- 3 出席委員(計11名、敬称略)
国富 泰二、小田 慈、上田 序子、山谷 富美枝、西井 研治、阿部 ゆり子
中瀬 克己(岡山市保健所長)、田中知徳(倉敷市保健所長代理)、則安 俊昭(健康
推進課長)、前田 潔(岡山県教育庁保健体育課長代理)、柴田義明(岡山県総務部総
務学事課長代理)

<議題1>麻しんの発生状況について

(委員)

平成22年の麻しん報告数のうち、IgM抗体検査で診断されたのは何件あるか。

(事務局)

平成22年は麻しん発生届3件のうち、IgM抗体検査(検査診断例)は1件であり、残り2件は臨床診断例であった。

<議題2>麻しんの検査体制について

(岡山市)

平成22年の岡山市保健所でPCR検査を3例実施しており、2例は陰性で、その内1例の発生届が取り下げられた。

(会長)

麻しんが流行していないと誤診が紛れ込む恐れがあるので、是非、PCR検査を行っていただきたい。

また、医師に対して、検査診断による診断の必要性及びその際のPCR検査は無料であるということも周知し、適正な診断をしていただくための研修会の開催を提案する。

医師会の研修会と合同で開催してもいいと思う。医師は、診断能力を上げて誤診が紛れ込まないように診断していく必要がある。

(事務局)

来年度、早い時期に、皆様方にご協力をいただいた上で研修会を開催し、麻しんの検査診断についても周知していきたい。

<議題3>予防接種の実施状況について

(会長)

感染症の流行を阻止するには、予防接種率は95%以上と言われており、第1期・第2期は95%前後となっているが、第3期・第4期の接種率は低いため、ここをいかに向上させていくか議論する必要がある。自治体で予防接種台帳を整備されているそうなので、接種がまだの人には再度の接種勧奨の通知を送って頂くことが必要である。一方で、学校

によって接種率に差があるので、子どもや保護者の方々へは、学校から接種勧奨をしていただきたい。

<議題4>本年度の取り組み状況について

(会長)

麻しん対策会議を立ち上げた平成20年には、未接種者への再接種勧奨等、取り組みを行っていない市町村が多くあったが、麻しん対策の取り組みが向上してきている。

(保健体育課)

公立学校の取り組みとしては、4月に開催する市教育委員会の担当者会議や養護教諭の研修会で、予防接種の必要性や接種勧奨について説明を行い、どの時期にどんなことをしたら効果的であるかということをお伝えしている。

4月は重要な時期であり、入学説明会においてきちんと周知するように説明している。

保護者の意向は非常に重要なため、保護者が集まる会や個人懇談で接種勧奨をするよう説明している。

接種率の高い学校の取り組みとしては、入学説明会で保護者に対して、入学式までに行えるだけ予防接種をするよう依頼しており、意識の高い学校では効果が上がっていると思われる。

また、中学・高校においては、子どもは、部活動の顧問とつながりが深いので、部活動の顧問から接種を勧めてもらうことは効果的である。

このような取り組みをしておりますが、同じ養護教諭が同じ取り組みをしても、学校によって、効果が上がらないところもある。

引き続き、接種勧奨に取り組んで参りたい。

(総務学事課)

私立学校の方は、公立のように運営には関わることではないので、きめ細やかには関わっていない。

麻しんに関する通知があった際には、各学校に呼びかけをし、私学協会の集まりには出向いて、依頼を行っている。

私立学校の第4期予防接種の接種率は、全般的に低くなっている。

今後、接種率が低いところには、接種を勧める働きかけを行っていききたい。

(委員)

養護教諭は、子どもの健康管理について、もっと権限をもつ立場にしてもらいたい。

また、学校医に啓蒙活動へ参加していただければどうか。

(会長)

学校医の研修も必要だと思う。

今年、県医師会で学校医も対象にした研修会を予定している。

研修会が一番大事で、実行までに距離があるとしても、まず麻しんについて知ってもらうことが必要である。

(健康推進課長)

研修会には校長先生の参加についてもお願いしたい。

メリットを普及していけば接種率は上がっていくと思われる。

研修会には、我々もできるだけ出席して、麻しん対策についてをお願いをさせていただきたい。

(保健体育課)

前回の麻しん対策会議で、当会議に校長先生にも出席をという話がありましたが、出席してもらうことについては可能だと思う。

(事務局)

来年度は校長会の代表にも参加していただき、2月頃に開催を予定してはどうか。

(会長)

校長先生に新しいメンバーに入ってもらえることはいいと思う。

来年、研修会を1回実施し、麻しん対策会議は2月頃に開催し、今年度のまとめと次年度に向けての取り組みを話し合うということでいかがか。

(委員：異議なく、全員一致で了解。)

次回から校長会からも会議に参加していただき、医師には研修会、市町村には予防接種台帳を活用して接種勧奨を行って頂くということでよろしく願います。

(事務局)

市町村と保健所が連携した取り組みも引き続き実施する。

(会長)

日本では福井県が一番麻しんの予防接種率が高い。

橋本先生がものすごく頑張られて、「予防接種が文化、ここまでいかないとだめだ」と言われた。

90%くらいまでは接種率が上がっても、あとの5%~10%は、打ちたくない人・無関心な人がいて上がらない。予防接種を打つことが文化にならないと、残りの5%が上がらない。岡山県でも、是非、予防接種を受けることが文化になるように進めるよう、よろしく願います。

(岡山市)

岡山市では、第4期の予防接種率が低く、学校別の接種率を見てもなかなか厳しい状況にある。

第4期の方に対して個別の接種勧奨ハガキを年2回(9月、12月末までの未接種者)送付している。

今後、学校との連携も頑張っていく余地がある。

公立・私立・それぞれの学校間でも差がみられ、データがあると更に働きかけやすい。

また、生徒が障がいを持っており、学校に行くこと自体が難しいなど、保護者の意識も予防接種にまでまわらないといった特性の学校もある。

県内ではないが、そういった学校で集団発生が起こっている地域もある。

もし、体が弱い方が多い中で麻しんが集団発生したら大変だということを、自治体での事例を元に伝えていけば、先生から保護者への話の仕方も変わってくるかと思う。

岡山市の麻しんの検査体制は、医療機関から相談があれば、なるべくPCR検査をするよう勧めている。

(倉敷市)

倉敷市で、今年度特に取り組んだこととして、①第1期の対象者について、赤ちゃんの

全戸訪問の際に接種勧奨を実施、②第2期の対象者には、未接種者に対して2月末～3月始めに個別勧奨を実施、③第3期・第4期においては学校への働きかけが重要と考え、第3期に対しては、保健部門、教育、保健所、養護教諭の4者を対象に研修会を共同で行い、問題の共有を図った。また、第4期については、高校へ個別の働きかけを実施した。

今後も、接種率等のデータも念頭にピンポイントの働きかけを実施していきたい。

なお、第3期・第4期については、2月末～3月の始めに再々個別通知（3回目の接種勧奨）を実施している。

（会長）

頑張っ下さっている結果で、麻しんの発生は減少している。輸入麻しんは我々の力の及ばない範囲であるが、油断できない。

<議題5> 予防接種センターの設置について

（倉敷市）

予防接種センターは、川崎医科大学での小児科の中に設置するのか、それとも新たに設けることになるのか。

（事務局）

今、調整を行っているところであるが、小児科の中に設けて、センター機能を有することになると思われる。

専用電話やFAXを設置し相談を受け付けることを予定している。

（倉敷市）

小児科ということになると、一般の方（海外渡航者など）には分かりにくいので、周知が必要であると思われる。

（事務局）

海外渡航者のトラベラーズワクチンについては、現在も川崎病院で実施している。

予防接種センターの立ち上げにあわせて、川崎病院もしくは川崎医科大学のホームページに予防接種センターとしてのコーナーをアップすることを検討してもらっている。

また、予防接種センターのチラシを作成し、配布することも検討している。

市町村予防接種担当者からの予防接種に関する相談にも対応できうよう、市町村予防接種担当者と予防接種センターをつなぐネットワークを構築したい。

（会長）

予防接種センターは、全国的で何カ所設置されているか。

（事務局）

全国で15カ所あり、岡山県は16番目である。

（委員）

予防接種は、施設において特定の方（個人）が知識を持って、対応されている状況があるので、もし人事異動があった時には、次の先生を捜すこと等柔軟に対応することを念頭に置かれていた方がいいと思われる。

（事務局）

対応できる先生がいることが、予防接種センターの大前提となる。

（委員）

先生の名前を出すこともいいと思う。問い合わせ先についても出してはいいか。

(事務局)

予防接種センターの問い合わせ先については周知する。医師の名前までは出すことは考えていない。

(健康推進課長)

今回、予防接種センターについて、当部会で諮り、専門の方々に了解をいただいて指定するという手続きを踏ませていただいている。

機能が低下するような場合には、必ず見直す必要があると思っている。

基本的な行政の姿勢として、効果あるものを設置していく。

(事務局)

次回の会議では、予防接種センターから1名、感染症対策委員会予防接種部会の委員として参加していただくことを考えている。

(会長)

予防接種センターの設置について異議はありませんか。

(異議なく、委員了解)

大人では海外渡航者、子どもではアレルギーのある方、基礎疾患のある方に対応できる体制を作るという意義のあるものである。

<議題6>その他

(1) 子宮頸がん予防ワクチンの供給不足への対応について

(会長)

子宮頸がん予防ワクチンの供給不足はについて、7月頃には概ね解消されるのか。

(事務局)

医薬品メーカーからは、7月頃には概ね需給見通しがたち、供給不足が解消される見込であると説明を受けている。

(2) 小児用肺炎球菌ワクチン及びヒブワクチン接種の一時的見合わせについて

(会長)

3月8日の厚労省の会議で一時見合わせが決定されているが、次回はいつ開催されるのか。

(事務局)

次回の調査会開催について、今のところ国から連絡は来ていない。

(委員)

あと10日くらいで、これらの結果について報告がでるので、今月末に厚労省の会議が開催される予定。(地震の影響で、延期される可能性はある。)

(6) 日本脳炎の定期予防接種について

(委員)

日本脳炎の予防接種で多い質問は、途中まで予防接種を行った者から、次回の接種時期についての照会が多いと思われるので、予防接種再開時には、混乱が生じないように、回答を統一されておいた方が良くはないか。

<その他意見>

(委員)

予防接種の接種勧奨は、健康診断のコール・リコールと同様に何度も呼びかけていくことが必要である。

それでも、健康診断で100%の受診は達成できない。会長が言われたように、健康診断や予防接種を文化にしないといけない。そのためには、親への呼びかけやチラシの配布などで、繰り返し教育していくことが必要である。

(会長)

文化を作るためには、行政の方からの力が大きい。親は、「子どもを充分保護する」必要があるが、予防接種を受けさせない親もあり、それは子どものチャンスを奪うこととなり問題である。

(委員)

予防接種は勧めるべきだと思っているが、中学校・高校の先生方を対象に話をするときに、一番多い質問は副作用についてである。

(会長)

その時の説得は、あなたは自然感染で亡くなる確率がいくら、予防接種をした場合の副作用の確率はいくらというように二者択一になる。このようなデータは、外国のものはあるが、日本のものは確定していない。

(委員)

メリット、デメリットをみながら勧めていくこととしたい。

(会長)

医学は0のリスクはない、より少ないリスクで選択していくしかないので、医師側がデータを提供をしていくことが必要である。

(委員)

その時、説明する言葉で『有害事象』と『副作用』の使いわけに気をつけなくてはならない。

混同すると、不安を煽ってしまうことになるので、使い分ける必要がある。

有害事象の中で、因果関係があるものが副作用であることを保護者に伝えると、納得してもらえることがある。

(会長)

日本の予防接種は、因果関係が否定されないものは補償している。補償すると因果関係が立証されているようだが、そうではなくて学問とのずれがある。こういうことをきちんと説明できないと、接種率は上がらない。